

平成 25 年度第 6 回、平成 26 年度第 1 回研究 WG 活動報告

はじめに

倫理委員会では、平成 26 年 2 月 10 日(月)に平成 25 年度第 6 回研究 WG (出席者 17 名)を(株)ドーコン会議室にて、平成 26 年 4 月 22 日(火)に平成 26 年度第 1 回研究 WG (出席者 21 名)を(株)中大実業会議室において開催しましたので報告いたします。

1. 平成 25 年度第 6 回研究 WG

(1) 第 5 回技術者倫理フォーラムについて

基調講演は、日本技術士会倫理研究会会員 杉本泰治先生をお願いすることを決定しました。事例研究発表は、倫理委員会委員が行うが、詳細は後日決定することとしました。

(2) ミニ講演会(富澤委員、伊藤委員)

ミニ講演会として富澤委員より「技術者倫理・演習 概要」と題して平成 26 年度に行う北海学園大学工学部の倫理学講義内容についての説明と、前回に引き続き伊藤委員より「技術者倫理の導入教育について」と題して過去に北大からの依頼を受けて行った講義内容が紹介されました。

a. 「技術者倫理・演習 概要」について

富澤委員より講義内容について以下のような説明がありました。

- ・ 難しく理解できないのは倫理ではない。
- ・ 大学の方針(シラバス)に従っているので、全体構成の比率は、大学の意向 50%、倫理委員会 30%、個人(の主張) 20%である。
- ・ 道徳の評価法をどうすればよいか。
これに対して各委員からは、以下のような意見等がありました。
- ・ 概念的な話は必要である。

- ・ 倫理問題を考えることは、身近な事例を数多く解くことが大事だと思う。
- ・ 1 日 1 ～ 2 題を集中的に解かせる。
- ・ テストの結果(採点)をどのように考えるか。思考の過程を重視する。グループで考えさせるのが良いのではないか。
- ・ 用語を理解することが大切である。
- ・ 時事問題は現在進行形の話なので正解は無い。正解はわからないけど、今生きているこの時代だからこそ、あえてトライすべきではないか。ただし、先生も解答を持っている訳ではない。

等等



平成 25 年第 6 回研究 WG 発表する富澤委員

b. 「技術者倫理の導入教育について」

伊藤委員より以下のような説明がありました。

- ・ 技術者倫理をアウトソーシングしている感がある。
- ・ 今の学生たちは回答を考えるのではなく、正解を求める傾向にある。
- ・ 技術者がどう生きたか、技術者の倫理は問われたか。

これに対して各委員会から意見が出されました。

- ・ 哲学書は否定から入る。極端な例としては、生まれてこないこと、若くしても死、という発想になる。ニーチェは若くして気が狂って死んだ(だから哲学書を読むのを止めた? 止める?)
- ・ 説明責任と内部告発はしっかりやるべきである。
- ・ 何故、内部告発をしないのか。→ 正解はない。みんなで悩む。
- ・ 科学技術だけでは解決できないものを付加して解決策を考えていく。

等等



平成25年第6回研究WG 発表する伊藤委員

その他、土木学会『土木技術者の倫理規定』の改訂素案について(富澤委員、橋本)、映画『100,000年後の安全について』(小野委員)が話題提供されました。

2. 平成26年第1回研究WG

(1)平成26年度 倫理委員会の進め方について

幹事会より以下の説明がされました。

- ・ 平成25年度倫理委員会の収支報告
- ・ 平成26年度の年間予定表についての説明
- ・ 平成26年度 定例会の進め方についての説明
 - 事例の概要説明を行った。
 - 第2回定例会以降、2人が一組となって『実務の役立つ技術倫理(日本技術士会登録技術図書刊行会)』に記載のケーススタディ5つを対象に事例研究を行う。
 - 担当者は、定例会の前の幹事会にPPT資料を作成し、幹事会にて内容を確認し本番(定例会)に望む。

(2)「こたつの中の携帯電話」と題した事例研究

(佐崎委員長)

佐崎委員長より、PL法に関連した携帯電話の欠陥に関する裁判事例のあらすじと、事業者、被害者、市民からの立場の回答例について解説され、議論されました。

【以下、各委員からの意見等】

- ・ このケースは実際の事例であり、PL法の第3条が裁判で認められた画期的な判決である。
- ・ 事業者は地裁で勝訴したが、高裁、最高裁では逆に敗訴した。→ 結局、賠償金を支払った。
- ・ 携帯電話に欠陥があったかもしれないが、取説にこのような使い方(ポケットに携帯を入れたままコタツに入っただけ)がダメだとは記載していない。
- ・ 電池パックがはずれているのであれば、使用者も問題があるのではないか。
- ・ 取説に身体的な火傷に関するリスクをどこまで書くべきかが重要である。
- ・ 製品には常にリスクがある。→ 取説に書かれていない事はいくつもある。したがって、技術者としてどう対処すべきか? 会社側の姿勢として、生じた事象に対し、どうしてそうなったのか要因を特定する必要がある。また、物事には、想像できない事象や確率が極めて低い問題などが潜在的リスクと内在していることから、被害者に対しては、謙虚な姿勢で対応すべきである。

等等



平成26年第1回研究WG 会議状況